

待降節第三主日

2009.12.13

(ルカ 3・10-18)

先週の日曜日にはイエズス会の具神父様をお迎えして黙想会が行われました。黙想会のテーマは『典礼暦から見た待降節の霊性』ということでしたが、事前に皆様からお寄せいただいた、典礼全般についての質問に答える形で、専門的な幅広い知識に裏打ちされた、丁寧で分かりやすいお話をしていただきました。大勢の皆さんが身を乗り出すようにして、神父様のお話に耳を傾けている様子がとても印象的でした。午前中には具神父様と林神父様がお昼のぎりぎりまでゆるしの秘跡をしてくださり、午後の講話の後も4時過ぎまで、大勢の方々がお残りになられて、ゆるしの秘跡に与っておられました。このような黙想会が出来たことは、黙想会に参加できた方にとってだけではなく、わたしたちの教会全体にとってとても大きな恵みであったと思います。私たちが集う教会において、私たちの中に来てくださる主をお迎えする、待降節にふさわしい心の準備と祈りが、わたしたちの教会の名において、今年も神にささげられたからです。あの黙想会の雰囲気と、そこでいただいたお恵みを大切に心のうちに保ちながら、教会としても、そのメンバーであるわたしたち一人ひとりとしても、降誕祭への準備を進めてまいりたいと思います。そのためにも、黙想会のテーマであった『待降節の霊性』ということ、これからの待降節のミサの中でも大切にしたいと思えます。「待降節の霊性」とは平たく言えば、待降節の心を持って生きるということです。教会の典礼暦が待降節を迎えるこの季節、待降節のミサに与ることによって、わたしたちのうちに、待降節の心が染み渡ってゆくように祈りたいと思えます。

待降節の心とは、今日の聖書のみことばが私たちに呼びかけているように、わたしたちのもとに来てくださり、わたしたちとともにいくくださるお方に向かって、わたしたちの心を向けてゆくということです。それも喜びをもって、喜びのうちに心を向けてゆくということです。喜びをもって、喜びのうちにと申しましたが、ここに待降節の霊性、待降節の心を生きるための鍵があります。わたしたちのもとに来てくださり、わたしたちとともにいてくださると、おっしゃっておられるお方を、喜びをもって、喜びのうちに迎えすることが出来るためには、わたしたちの心をそのお方に向かって、しっかりと方向づけなければなりません。

わたしたちを取り巻き、わたしたちがその中に生きている現実だけに目を向け、それだけに心も魂も奪われたままでは、決して心底、喜びをもって、喜びのうちに、わたしたちのもとに来てくださろうとしておられるお方を迎える気には

なれません。ここに、待降節の靈性を生きる難しさがあります。わたしたちは、わたしたちの力だけによっては、わたしたちのもとに来てくださるお方を喜びのうちにお迎えすることは出来ないのです。わたしたちの心に纏いつき、わたしたちの心を脅かしている現実の世界と現実の生活の厳しさと、そこから生じる不安はいともたやすくわたしたちの心から喜びを消し去り、来てくださるとおっしゃっておられるお方への希望を打ち砕いてしまうからです。

喜びをもって、喜びのうちにおわたしたちのもとに来てくださるお方をお迎えしようという待降節の呼びかけは、このようなわたしたちの世界の現実とその中に生きるわたしたちの生活の現状を無視しているのではありません。むしろ、そのようなわたしたちの現実の世界の中に、わたしたちの現実の日々の生活の中に、わたしたちが待ち望んでいる、わたしたちに救いをもたらすお方が来てくださると宣言しているのです。

わたしたちはキリスト教の信仰を生きるものとして、わたしたちのもとに来てくださるお方が、わたしたちにもたらしてくださった救いがどのようなものであるかを知っているはずです。わたしたちのもとに来てくださるお方は、わたしたちのこの現実の世界と、現実の生活の只中に来てくださり、わたしたちに神の愛とはどのようなものであるかを示してくださったのです。わたしたちのもとに来てくださるわたしたちの主イエス・キリストが私たちの現実の中で宣言してくださったことは、たとえこの世界の全ての人々が、このような現実に疲れ、このような現実を憎み、絶望の淵に沈んでも、この世界の真の創造主である父なる神は決してこの世界とそこに住む一人ひとりのわたしたちの現実を見捨ててはおられないということです。そのことをわたしたちに示すために、その愛をもってこの世界の全てを包むお方が、このわたしたちの現実の世界にその一員となって包み込まれるために、わたしたちのもとに来てくださったのです。そのお方をわたしたちのそれぞれの現実の中に、心も新たに喜びをもって、喜びのうちにお迎えすること、待降節の靈性とは、わたしたちがわたしたちのもとに来てくださるお方に目を向けて、そのような心になれることを、ひたすらに願うということです。

今日の福音は、このような待降節の靈性を生きるための模範としての洗礼者ヨハネの姿とそのメッセージを、わたしたちに思い起こさせます。福音書に描かれているヨハネの姿は、ただ一本の指になりきることによってわたしたちのもとに来てくださるお方を指し示しているように思えます。ヨハネが指し示している、わたしたちのもとに来てくださるお方は、聖霊と火による洗礼を授けてくださるお方です。聖霊と火による洗礼をもってわたしたちのもとに来てくださるお方は、それによって何をしてくださるのでしょうか。わたしたちの現実の中

で真に神の国の蔵に収められる実を集めてくださり、わたしたちの現実の中の燃やし尽くされるべきものを全て火に投げ入れて清めてくださるのです。わたしたちの何が神の国の蔵に収められ、何が燃やし尽くされるべきかの判断は、わたしたちが決めることではなく、わたしたちのもとに来てくださるお方がなさることです。こうしてわたしたちは、わたしたちのこの現実を生きる生活の全てを、わたしたちのもとに来てくださるお方の判断におゆだねすることが出来るのです。わたしたちがこのことを受け入れることが出来る時、わたしたちはそのすがすがしさを知ることが出来、真に喜びに満たされる事が出来ることでしょう。この現実の世界の中でわたしたちを苦しめているものは、現実の厳しさもさることながら、このような現実とそれを生きねばならないわたしたちの生活にどのような意味があるのか、その意味を見出せないということではないかと思えます。分からないままでいい、分からないまでもその判断をおゆだねすることが出来るお方と出会えたこと、その喜びを知ることが出来た時、わたしたちはこの現実にも身を置きつつ、そこから解放されて、真実、わたしたちのもとに来てくださった、わたしたちの主イエス・キリストを喜びをもってわたしたちの中にお迎えすることが出来るのです。

待降節の霊性とは、わたしたち一人ひとりが、このようなわたしたちの信じる信仰の極意と、それを身につける術を知って、どのような現実を前にしても、わたしたちが信じる、わたしたちのもとに来てくださったお方の限りない力に信頼して前向きに生き続けるということです。現実に行き詰まっている全ての兄弟たちのことを思いながら、わたしたちがともに信じるこの待降節の信仰が、その兄弟たちを励まし、力づけるように願いをこめて、今日の待降節第三主日のミサをおささげしたいと思えます。

カトリック高円寺教会

主任司祭 吉池好高